
道標のあずさ

antipas group

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道標のあずさ

【Nコード】

N3430Z

【作者名】

antipass group

【あらすじ】

人なら誰しもが考える、心の深いところにある哲学的なこと。心理的なこと。ヘンな女の子、あずさ、に巻き込まれていく男女の数奇なストーリーここに開幕！

夢遊病少女に、植物状態の少女、重病棟勤務の看護師など…、おのおのの立場で、それぞれが悩んでいる人生の不思議。

彼女たちは奇妙な縁から倉下梓という女の子を捜すことになって…、彼女たちは無事、思いの果てにある答えに辿りつくことができるの

だろうか…

毎週 月・木更新!

この小説はArcadiaにも投稿されています。

前作「あずさが通る!」 <http://ncode.syosetu.com/n0971w/>

<http://ncode.syosetu.com/n0971w/>

序章 人で在って、人で無いもの（前書き）

ご無沙汰しています。今作「道標のあずさ」は前作「あずさが通る！」よりも格段スケールアップしております！あずさ以外にもたくさんキャラが再登場しています。場所も熊本だけでなく、某古都を出したり、実在する宗教の解釈も絡めたりと前作よりも複雑で凝った構成になってます。前作同様、ぜひ楽しんでください！

序章 人で在って、人で無いもの

序章 人で在って、人で無いもの

「まあとにかくおめでたいこった。あの小さかった子供が、今やこんなボインちゃんだからな。立派に育ちよって…わしも年を取るわけじゃの…」

彼はそう言って、大ジヨツキを煽った。

「お前って、いま新聞記者だったっけか？…仕事は順調か？」

「ああ、順調だ。今は編集部班長だよ。部下だっているぞ」

「フン…ガキがいつちよ前に班長と来たか」

彼はそう言って、浅くため息をついた。

「…酔っ払う前にやっちまうか。ホレ…、メガネ取って、顔を近くに寄せなさい」

店を退いたと言っても、アレはまだまだ現役のようで…。私は素直にメガネを取って、彼に顔を寄せる。

「最近すっかり乱視が進みよってな…ホレ、もっと近くに寄らんかい」

「あんたの場合もう老眼だろ。あまり寄らせるな。気色悪い…」

「引退前も爺婆ばかりでな。若い娘は久しぶりで興奮するのう…」

「もう若くは…ええい！触るな！…この距離で…さっさと観ろっ」

「若いのにケチじゃのう…もっと年寄りを大切に扱わんか…、まっ

たく……」

彼は水晶玉も虫眼鏡も使わない。ただ……顔を見るだけだ。ウチの社の近くを通ったというだけの理由で、私は酒の席を都合させられた。

「渋い顔しおって！……大スクープの一つや二つは都合してやるわい。酒の一席や二席、安いもんだろぅが」

「……いくらあんたの占いが当たるからといって、起こっても無いことを記事に出来るか！」

「なんじゃい……固いのう。あんたんトコは」

「……ウチ以外の社だってみんなそうさ」

彼は焼き鳥の串を豪快に口先から引いて、肉とネギを頬張った。人の金だと思つて遠慮が無い。

「で、……どうだった？……私は？」

肝心の事を彼に尋ねる。彼の……コレばかりは、ドキドキせずには聞かれない。

「あ、お姉さん！大ジョッキおかわりええかいの？串も全種類三本ずつ追加じゃ。ジャンジャン持って来なさい！」

言つて、今持っているジョッキを飲み干し、ガツンとテーブルに置いた。

「なんじゃい。結果、聞きたいのか？」

聞きたいに決まってる。それなしにこれだけ飲み食いする気なんだろうか。この爺は…。あまり調子に乗ると、それはそれで厄介なことになる…。私の表情からそれを察したかのように、彼は喋りだした。

「洋香：お前、迷つとるのう。結婚…いや、違うな…。仕事のことか、男は相変わらずいないようだのう？部下にも、以前より恵まれておるな……」

言って、おしぼりで顔を拭きながら、目線だけをこっちに向けて、

「…フン、脱サラでも考えとるのか？お又シ??」

そう言う。

相変わらずよく当てやがる…。占いは、知識と経験は一割ほど、推理が五割、感が五割…と昔から言い張っていた爺…。計算が合わないのが爺らしく、言い回しに爺さんの天邪鬼な感じがよく出ていた。

「…おぬしは未だ帝王の相を持つてる。ほんの少しじゃがの…。何をやってもそれなりの成功はするじゃろうよ。まだまだ若いのに…そのツラ持って迷うかねえ…。好きにやればいいさ」

彼は、優しい目で静かに私にそう言って、品書きを手を取った。

「あんた…まだ食べるのか？」

「なんじゃい?…経費で落ちるじゃろ??」

「今は経費も口々に落ちんよ。時代性は読めんのかあんたは…」
「なんじゃ…お前のところも厳しいのか？」

彼は名を藍老伊三郎と言い、この熊本県熊本市に占いの店を持つ、名うての占い師だった。若い頃は日本各地を放浪し、あらゆる人相を観てまわり、自分の見識を高めた。道中のどこかで占い…というか、人相見の極意のきっかけを掴み、真理を開眼したとのことで…それ以後、彼の占いは、酔っ払い相手だったチンケな商売から、実業家や政治家相手の…会社や国の未来をも左右するものにまで成長した。そして、その名が天下裏で轟くほどとなり、社会的成功と金名譽、人脈を手に入れた。

ここまでは良かった。しかし、ある日…ふと鏡を見た際、自分の人相の難を見抜いてしまった彼は、破滅の道を辿る前に、家土地と財産をすべて処分し、熊本市という自分の生まれ故郷に、四畳半のアパートを借り…、店となる小規模な商業スペースを間借りし、占い屋を開いて…細々と生きることにした。本人曰く…それで自身の死を免れたそうだ。

私は小学生だか中学生だかの時、ホームレス同然だった彼と、ふとしたことから知り合い、学校つまらないことから、人生のあり方、オカルティックなことまで…彼に喋った。

彼とはそれ以来…十数年の付き合いになる。生まれつき、オカルトなこと…霊だとか、UFOだとか、未確認生物だとか、X-FI LESだとか…そういうモノが好きだった私は、当時お化けみたいな格好をして…河原にいた彼に、好奇心いっぱい話しかけたことを今でも覚えている。

会った時から彼には口癖があった。

「ガキにわかるかねえ？ 要は…見てみたいだけなのよ」

「…何を？」

「神か悪魔か…そういうもんじゃな…」

子供だったこともあり、最初こそ小馬鹿にしたものだが、事あるごとに言つわ、目は真剣だわ、そして…どこか寂しそうに言つもんだから…いつからか、私にとってもすごく気になることとなった。そして、私は聞き逃さなかった。彼は何度か、

「…もう一度見てみたい」

と、そう付け足すこともあった。もう一度ということとは、今までにも見たことがあるということだ…神だか悪魔だか…そういう人外のモノを…。

しかし、彼はその存在をこう説明していた。

「まーたお前は…話をそういうオカルティックな方へ持って行きたがる…。人外のもんなんてこの世におけるわけないじゃろ。…わしが言っとるのは、あくまでも人間のこっちゃ」

藍老の爺さんは、占い師なんぞやってるくせに、私と違って…オカルトなものは頭から否定する傾向にあった。そういう面では実につまらない。

「お前らよく芸能人オーラとか、雰囲気がある人とか言っておるじやろが。世の中にやな、あのオーラかなんだかよくわからんもんを、滅茶苦茶なレベルで醸し出すやつがおるんじやな。…そういうモンをだな、わしや神だの悪魔だのと呼んでおるんだ」

彼はよくそう言っていた。そして、神だか悪魔だかをもう一度目にする事ができたなら、わしや引退する…とも。

幾度と鳴っていた、公衆電話からの着信。公衆電話からかけてくるのは彼しかいない。掛け直しが利かないため、連絡はいつも一方的だった。その彼からの連絡は、十日ほど前…年の暮れの忙しい時期に来た。

「お、やっと電話に出よったのう。…いやなに、今？…待ち時間をヒマしてるとこじやい。実は、先日わしや店を畳んでの。今度近くに行つたときに酒でも一杯、と思つとつてね。もしもし？…まだまだ腕は確かじゃぞ。酌に付き合ってくれるなら、特別におぬしをまた見てあげてもよいぞ」

店を畳んだ？…爺、ついに見たのか？神だか悪魔だかの存在をいつに見たのか…。ついこないだまで、

「わしや、一生こつして…せこい店を構えておかねばいかんのかもしれんなあ…」

などと、弱気に言っていたことが思い出される。良かったのか悪かったのか…。

藍老爺に関しては、もうひとつ気になることがあった。それは彼の占いの腕のこと。旅路の最中に開眼したとの話は、すでに触れた通りだ。酒に飲まれた彼が、一度だけ口からこぼしたその言葉を、私は鮮明に覚えている。

「いや、それがの…開眼したと言っても、そんな大仰なもんじゃない。ちよつとしたコツを教わった…というか気づいただけでの。それを必死で真似…というか、実践しただけでの」

肝心なところは煙に巻いて話す彼が、珍しく饒舌だったあの晩、

「…思えば、あれが始まりだったわい。あの異質な存在感と…神だか悪魔だか…到底、人とは思えないほどの雰囲気纏っておった…」
確かに…そう言っていた。

(神だか悪魔だか…それほどの人物…開眼…そして、引退した理由の…もう一度出会ったのであるうその存在……。くそっ、私の人相よりも気になるなあ…)

すでに聞いてしまっている…絶対に当たるであろう、私の人相占い。それは芳しいものであった。私の心は、すでに未来予測には満足していて、彼に対する知的好奇心だけが残っている。

意外にも、彼は私の質問を待たずと言った。

「そんなに焦らすもんでもないわな。引退した今、秘密にすることもない。オカルト好きのお前が好きそうな話じゃな」

言って、

「かつつかつか…、冥土の土産じゃな。何から知りたい？」

乾いた笑い声とともに、彼はそう付け足した。

「メイド…？爺…、縁起でもないことを言つなよ…」

それを聞いた彼は微笑して、運ばれてきた大ジヨッキを手にした。

私は目を細くして、聞いた。

「何があつて…その慧眼を身につけた？」

彼は眉をしかめて答える。

「なんじゃ？お前も占い師になりたいのか？…止めとけ止めとけ。ロクな最後にしかならんぞ」

言って、手羽先を頬張る。

「…おぬしはわしと同じ人種じゃい。人を深く勘繰ると、不幸になる人種なのよ。感じとろう？わしとここまで長く仲良くやってこれたのは、同じ人相にある人間だからなんじゃ」

「安心しろ。あるのは知的好奇心だけだ。この年になって、今更占い師なんかやらんわ。爺さん…誰と出会って、何を学んだ？」

「わしが占いを始めたのは、おぬしより年をとってからじゃがのう…」

彼はしわしわの顔をさらにしわくちやにさせた。

『お前、ホレ…。新聞社勤めだったら知つとろうが？…あつこの教祖様じゃ。…氷川の「深い森」のこと知らんか？』

「深い森」…前田千歳という女性を教祖として、熊本県は八代市の氷川の山中で、自給自足で暮している…総勢五十人ほどの新興宗教団体のことだ。

「そうか…あの白い女が絡んでいたのか」

彼は意外そうな顔をして、

「なんじゃい…？会ったことがあるのか？…ああ…そうだったか」

「学生の時に…一度だけだな」

あの透き通るような白と、異様な空気感が脳裏に甦る。あれか…あの女が絡んでいるのなら、どんな話でも頷ける。

「わしはな…あの白い女が子供の頃に一度会ったことがあつてな。その時はまだ…そこまでのもんを見抜けなかつたが、二度目に会った時…、その目の奥にあつたもんを盗んだんじゃよ。そして、世界の理を彼女から学んだ。…わしやその理を必死で学んで、彼女の眼の奥にあるものを自分も宿そうと、そう思って実行しただけじゃ」

言って、付け足した。

「そりゃ…物理的には人間じゃい。だがの、中身の方は人間をゆうに超えとる…。おぬしの言うとおり、人外と表現しても差し支えないわな…ありゃ」

そして、爛された酒を一口、ズズ…と飲んで続けた。

「もしも、…また会いたいと思うんなら止めておけ。どうしてもというなら…人を介せ。おぬし以外だったらまず人畜無害…。わしやおぬしと同じ相は、なかなかおらんからな」

彼の目はいつになく真剣だった。これは外れない…。素直にそう思った。

私は息を飲んで、もう一つの質問をする。

「なぜ店を閉めた？」

彼は熱燗もビールも飲み干して、赤い顔で遠い目をして言った。

「見たからじゃよ。もう一人の人外のをな…」

「ついこないだ、何の前触れも無く…年上の男と二人でわしの店に来おった、若い…娘じゃったわ。目だけで語るヤツだった。正直…目と思考そのものが深すぎて、わしじゃ読みきれなんだ…。白い女とはまた違う感じでな…いやはや、とにかく…驚いた」

彼は、いやに神妙な顔つきでそう語った。

「…若い女？」

「ああ、奇抜な格好の女だった。ランドセルみたいな赤いカバンを持ってな。見た目は常人なんだが…、話し振りや…いや、やはりきやつのも、そこから知れる思いというか、態度というか…それがなあ…」

爺の話はそれから少しだけ続いた。

私はカードで支払いを済ませ、飲み屋を後にした。爺は、

「おい、人生は楽しむもんだぜえ…細けーこたあ考えようとすんなあ」

と言って、随分に飲まれたフラフラの状態でタクシーを拾って、帰途に着いた。

時候は、年が明けて間が無い…冬の世相を演出している。国内でも南に位置する熊本市といっても、この時期の身震いする肌寒さは他県のどことも変わらない。雪こそ降らないが、息は白く、あまり外に長くは居たくない。が、夜はすっかり更け、雑踏の音もフェイドアウトしていく時…この黒の空の下、私は自宅まで歩いて帰ることにした。そういう気分だった。

元々…化け物だとか、鬼だとか、神だとか、悪魔だとか、すべては人間の在り方や、それでなくとも…人間に起因することが圧倒的に多い。

キリスト教の神であるイエス・キリストは人間であつたし、生きながら仏となつたお釈迦様だつて、物理的には人間だつた。MONSTERのヨハンだつて人間だつたし、昔話に出てくる赤鬼も、西洋からの渡来人だつたという説がある。

そういう異質な存在は、たとえ科学的には人間でも、印象的には人外になる。そして、この現代においても、今日のような宴席の四方山話に尾ひれがついて、人々の噂となり、四方に広がっていく。そう、人の恐怖心や興味心のようなものを喰らい、人々の心にある…： 畏怖される存在だけが大きくなっていくのだ。

しかし、稀にその人々が噂する…： 想像する人外の姿を、実像が大きく上回るといふ例があることを私は知っている。

私は、藍老爺の人生を変えた白い女…： 前田千歳という宗教団体の教祖と会つて、一言二言話したことがある。猟奇殺人があつた直後の現場で…：。あの時の印象は、私自身の中で畏怖され、誇大化している可能性もあるうが、後に聞いた彼女の数々の噂が、私の心象のモノを上回るとは…： ただの一度も無かつた。

「…： くらした、あずさ…： か」

藍老爺は、自身を引退させるに至らせた…： もう一人の人外のモノの名をそう語つた。そして、

「白い女と同じじゃ…： おぬしは絶対に会つな。会つのであれば人を介せ…：」

とも。

私は新聞社に勤務して十年ほど。年齢の割に、そこそこの位置まで登り詰めた。そしてここに至って、自分の趣味でやっている、オカルト季刊紙「不思議な女の子」を中心とした出版社を立ち上げ、それで独立したかった。藍老爺は、

「おぬしは未だ帝王の相を持つてる。何をやってもそれなりの成功はするじゃろうよ…好きにやればいい…」

そう言っていた。

「…決めた。その、くらしたあずさを取材して…次号に載せて、それが叶うようなら、独立案を具体的に詰めていこう」

この寒空の下、私は藍老爺の話を反芻するようにして、自宅まで歩いた。白い吐息を宙に舞わせながら。

彼の訃報が届いたのは、それから十日も経たないうちだった。川縁で釣りをしていたところ、複数の中学生に暴行を受け、川に落ちて溺死したという。

(…なんと、無残な…)

仕事だった私は、警察からの連絡に目頭が熱くなるのを必死で抑えた。

さらに数日を経て、少しは落ち着いたか…という頃、思考が勝手に色々考える。

(…あれほどの人物が自分の最後を見落とすか?…いや、予見して

いたはず…。引退…。待ち時間…。冥土の土産…。自分の占いの秘密をぺらぺら喋ったのも…。今なら領けるな…。

(白い女の目の奥にあったもの?…世界の理って…なんだ?…思えばあれが始まりだった…??)

白い女には、もう会いたくないし、藍老爺にも会うなと釘を刺されている。くらしたあずさの方も同じ…。いや、どうだろうか…。取材すれば…。私も暴行を受けて殺される運命を辿るのか…??

私はぼんやりと…。形を定められない雲のような、ふわふわとしたことを考えていた。いかにオカルト好きで、マンガみたいな…。突拍子も無い解釈の余地を与えられている私の脳みそであろうとも、彼の一生を想像できるには至らない…。

「好きな食べ物は、後に残すタイプだしな…。私は」

一歩一歩、気になることは時間をかけて、少しずつ詰めていこう。私はそう思って、職場のデスクに顔を伏せて泣いた。

序章 人で在って、人で無いもの（後書き）

早速再登場しているのは洋香姉さんです。前作では脇役としての登場だった彼女ですが今回は??乞うご期待です。なお、連日更新ではなく毎週月・木更新になっております。一回分の文字数は前作の倍以上になりますのでガッツリお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3430z/>

道標のあずさ

2011年12月11日20時53分発行